

鸚鵡小町

折口信夫

青空文庫

謡曲小町物の一で、卒都婆小町など、共に、小町の末路を伝へたものである。小野小町御所を出て、年たけて、関寺辺の柴の庵に、住んでゐた。陽成院小町の容子を聞こしめされて、新大納言行家に、

雲の上は、ありし昔にかはらねど、見し玉簾タマダレの　　うちやゆかしき

といふ御製を預けて、其有様を見がてら、返歌を聞いて来るやうに命ぜられた。関寺に行く、物狂ひの老女が来るのを小町かと聞くと、小町は小町だが、お公家様として、妾の事を問はれるのは、何事の用だと言ふ。歌を詠むかと問ふと、かう言ふ身の上になつて、唯生きてゐると言ふばかりだと答へる。天子もお前をおいとほしがられて、御製を下されたと言ふと、其を読み聞かせてくれといふ。読み聞かせると、喜んで、あり難い御歌だが、とても返歌を申すことが出来さうにもない。けれども、御和コタへ申さぬのも、恐れ多い。此上は、唯一字で、お和コタへしようと言ふ。行家は、なるほど世間で氣違ひだと言ふのも、こゝだと思つて、三十一字を並べても、意の尽されぬ歌もあるのに、変な事を言ふと咎めるともかくも「ぞ」と言ふ文字が、わたしの返歌だから、御製を今一度読みあげてくれ、と言ふ。「雲の上は、ありし昔にかはらねど、見し玉簾のうちやゆかしき」。その「や」を

読みかへて「うちぞゆかしき」と申すのが、返歌であると言つたとあるのが、此話の本筋になつてゐる。

此から、勅使が、昔にも、かう言ふ歌の例があつたか、と問ふ処から、鸚鵡返し of 体の事より、歌の六義の話に入り、其縁で、玉津島・業平の話になつて、例の舞ひの所望に移り、小町の狂ひになる。後段は、狂ひを見せる為の趣向で、本意は、勿論前段にある。処が、其贈答の話は、実は他人の上にあつた、事実めいた話其儘である。

桜町中納言（信西入道の子。成範民部卿）が、平治の乱の末に、経宗・維方の讒訴で流されてゐた下野の室の八島ムロヤシマから戻つたが、以前の様に後宮出入りが自由に出来なかつた。此人の通り過ぎるのを見て、女房の中から、其かみの事を思ひ出したのが、此陽成院の御製と伝へた歌の通りの物を、さし出した。成範が返歌を考へて居る処へ、重盛が上つて来たので、急いで立ち退きしなに、燈楼のかきあげ文字を消して、ぞの字を書きつけて、御簾の中に、さし込んで退出した（十訓抄）と言ふのが、其である。

国歌大観によると、二条院崩御の後、俊成の作つた歌と言ふの（新千載に「雲の上はかはりにけりと聞くものを、見しよに似たる夜半の月かな」）がある。此は全く、かの歌を本歌にとつたのである。故らに本歌と意識せなんだ迄も、其印象の復活したものと見れば、

俊成以前に此歌のあつた証拠にはなる。

桜町中納言は、俊成と略時代を接した人であるから、勅撰集に載らない此逸話を持つた歌を覚えて居たのが「夜半の月」の種になつたことは、疑ひがない。武家の初めに、鸚鵡小町の伝説が名高かつたものなら、恐らく十訓抄の作者も、桜町中納言の逸話として、書き留めては置かなかつたであらう。歌柄も、後期王朝末のものと見るが、適当らしくはあるが、仮りに女房の頓作から、古歌の字をかへて示したのを、直ちに原歌に戻して自分の心を述べたとしても、確かに小町の歌として信すべきものには「雲の上は」の歌を伝へてゐない。

此歌、意味から言うても、宮中にあつて、而も後宮に立ち入ることが出来ぬ場合でなくては、不適當な発想を持つてゐる。小町が関寺に居ての返歌ならば「ありし昔にかはらねど」は、間違ひである。平安朝初期の条件法の嚴重であつた時代には、たとひ興言利口にも、「かはらざらめど」と言はねば通じなかつたであらう。成範はさて置き、後期王朝末頃の人が宮中にゐて、這入り難い後宮をゆかしがつたものと見るのが、一番宛てはまつてゐる様である。「たまだれの内裡ウチ」と枕詞風に見ても、此点の不都合は免れることが出来ぬ。思ふに、後宮を出て、里におりた女房たちの、昔の賑やかな生活を忍ぶ趣きが、此歌にも

感じられる処から、単に言語情調の方面ばかりから、かう言ふ伝へが出来たのであらう。伊勢御（大和物語）備前（今鏡）などの、愛着深い歌と同列に、此歌を名高い女房の秀句の様に、思ひ違へするのは、尤の事で、兼ねて、

わかるれど、あひも惜しまぬもゝしきを、見ざらむことの なにか悲しき（伊勢）が、其大きな導きになつてゐることゝ、推察してもいゝやうだ。

併し又、一方「死馬の骨を買ひし者あるを聞かずや」といきり立つた清少納言と同様「我也昔は」とも言ふべき形を、含んでゐるとも見える。尚其外にも、棄老民譚の王朝の一形式とも言ふべき、蟻通し明神（枕冊子）風の「老いの智慧」の要素をも持つてゐる。「月には上る、長安百尺の楼」と訓じ聞かせた大江朝綱の家の姥（今昔物語・江談抄）などの流も、引いて居る様子である。

武家が都に入りまじる様になつた王朝末に、殊に目について来たのは「賤シツのみやび」に関する様々の物語であるが、此が此小町の物語には、融合して居る。併し、其で此物語の出来た時代をきめる事は出来ぬ。唯其何々院と、大局に関係のない年代づけをしたがるのは、口の上の物語よりも、筆拍子に乗つて出来た物語だからでもあるが、要するに、此物語の出来た時代の影響を、脱することの出来ぬのを示してゐる。

桜町中納言は、泰山府君の桜の命乞ひをした物語も残した人で、謡曲にも、其形が見える。此物語は、鎮花祭及び念仏踊りの系統に属する詞章出なのである。さすれば、桜町に住んだ陰陽師の徒の語り物であつたのが、主人公を桜町中納言とし、其が流派の違つた演芸者の語り物に移つて行つた時に、其派の主要人物たる小町の事になつて行つたのではあるまいか。

青空文庫情報

底本：「折口信夫全集 2」中央公論社

1995（平成7）年3月10日初版発行

初出：「土俗と伝説 第一巻第三号」

1918（大正7）年10月

※底本の題名の下に書かれて居る「大正七年十月「土俗と伝説」第一巻第三号」はファイル末の「初出」欄に移しました。

※底本では「訓点送り仮名」と注記されている文字は本文中に小書き右寄せになっています。

入力：門田裕志

校正：仙酔ゑびす

2006年12月31日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られ

ました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

鸚鵡小町

折口信夫

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>